上田城下町は真田昌幸・信之父子の傑作です！　　西澤文登

はじめに

　上田は上田城を中心として造られた典型的な近世の城下町です。その最初の設計者はであり、関ヶ原の戦い以後の開発整備の実行者は嫡男のでした。上田城と上田城下町に真田時代の史跡は大変少ないといわれます。上田城はご存知のように関ヶ原の戦い以後破却されて（の）更地同然になってしまったそうですが、真田信之に替わって入ってきたによって再建されました。その再建に当たっては真田時代の縄張りを踏襲したといわれます。従って城の縄張りそのものが真田の史跡であり、まちの構成、アウトラインも真田の史跡といえるのではないかと思います。地形を最大限に活かした城の置き方、の配置、武家町の構成と位置、大手の位置、商人町の移転とその機能、川を利用した職人町の形成、街道を引き込んだ交通路の整備、それを守る村の移転造成、総構えを広く取った外堀の造成、寺社を移転させての防衛線の形成などなど。昌幸の引いた設計図を基として、状況の変化に対応した信之の実行力と応用力が成した父子共同のみごとな作品であると思います。

　松代藩佐久間家に伝えられた上田古図というのがあります。城が屋形として描かれています。上田城は天正十一年に着工され同十三年頃完成されたといいますからそれ以後のもの、もしくはその頃の様子を後で描いたものと思われます。この古図の右下に「象山」の朱印があります。佐久間象山が所持していたという伝承がありますが、本当にそうだったのかも知れません。ここに武家屋敷らしきものは「常田御屋敷」があるだけです。上田城本丸を表すと見られる屋形の周囲は水壕と柵で囲まれています。「すはべ」「西脇新町」「新鎌原」「「新房山」「上田」「常田」と記された所には家並みを表すとみられるものが、ほかは田畑を思わせるものが描かれています。印象的なのは沼と表記された池があちこちにあり、川（水路）が縦横に走っていることです。第一次上田合戦の直前の様子かも知れません。のどかな田園地帯だった所に城を築き、村や町を移転させ、新しくまちを造ろうとしていたことが示された図です。昌幸の頭の中にはこの絵図と同じような図があり、これをどう展開し、将来的にどのようにするかが描かれていたと思われるのです。

いくつか残されている絵図をかたわらに真田父子がどのように上田城下町を形成して行ったのか、その特長を追ってみようと思います。

真田昌幸は信玄学校の優等生！

　昌幸は天文二十二年（一五五三年）八月、父（）への秋和三百五十貫文の領地宛行の代償に名将のもとに人質として出されたということです。若干七歳の少年でした。人質といっても信玄の奥近習の扱いだったようです。今の小学校入学と同じぐらいの齢ですから、ここで昌幸は武田信玄校長のもと、読み書き算術など基礎学問を身に付けたに相違ありません。成長すると共に武田流の兵学、他人との外交術などを学んでいったのでしょう。築城術なども学ぶ機会があったとおもいます。昌幸は大変優秀で信玄のお気に入りの存在だったようです。に「わがなり」と信玄に言わしめたというくだりがあります。真田昌幸は信玄学校の優等生だったのです。

　余談になりますが、武田信玄は自分の子飼いの家臣の名前に「昌」の字を入れたといわれます。生島足島神社に信玄起請文が展示されています。国の重要文化財に指定されていますが、起請文を出した武将に「昌」の字がつく名前がいくつか見られます。真田昌幸の他にこの近辺ではがそうですし、大河ドラマ「真田丸」でおなじみのがそうではありませんか。昌幸の弟のも初めは（とも）でした。彼も昌幸と同時か、時期をずらして信玄のもとに送られた可能性があります。またこれは今までいわれていないことですが、昌幸のすぐ上の兄で長篠の戦いで討ち死にしたも「昌」の字を持っています。ことによったら昌幸以前に信玄のもとへ送られていたのではないでしょうか？信玄は子飼いの家臣に「昌」の字をつけ、自分のの家臣として育てようとしていたといわれます。

　昌幸は苦労の末に上州沼田城を攻め取ります。また武田氏最後の砦となった（韮崎市）の建設ではの一人として尽力しています。この二つの城と上田城は外観の地形がよく似ています。三つの城とも断崖になった段丘の上に建ち、その下を川が流れているのです。沼田城は利根川、新府城は釜無川、そして上田城は千曲川です。難攻不落の築城術も信玄学校で学び、上田築城に当たっては、持ち前の聡明さに多くの経験を積んで培われた知識と技術が駆使されたのです。

上田城の総構え

惣構えとも書きますが、城の外郭、または城の内部全体のことを総構えといいます。これには町人町も含みます。つまりその城下の規模を示すものと考えればよいと思います。上田城の総構えはとを外堀としてその内側と考えられます。現在公園となっている所だけではなく、かなり広い部分が上田城なのです。陸上競技場と野球場になっている所は昔と呼ばれた二の丸の堀跡ですが、築城前は矢出沢川が流れ込んでいたといわれます。その矢出沢川を北に移動させ常磐城の高橋の所まで伸ばし、丸山邸の脇を通って千曲川に流れ込むように流路を変更しました。また蛭沢川の流路も東にふくらませて矢出沢川に合流させるということも行っています。これはすなわち上田城の総構えを広くとるための工夫と考えられます。

が著した「信濃国小県郡年表」に年間上田城図が入っています。この図は後に描かれたものと見られ信憑性にはいくらか欠けるところがあるといわれますが、ある程度確実な伝承を基に表されたものとされています。ここに「昔ノ惣構」と記述された箇所がいくつかあります。信之が上田城主の時代の絵図ですから昔というのは昌幸時代ということになります。昌幸が考えていた総構えより広がっていたということを示しています。昌幸時代は村に住んでいた武士たちが、信之の時代になると城下に移り住んで来て、屋敷町を広げる必要があったと考えられています。

の配置と陣屋支配

　大きな武家屋敷を館と呼びます。城主やその親族が居住しました。今上田には先に述べた常田御屋敷（信之時代の城主館　今の上田高校）と現在清明小学校になっている所が館跡で残っています。

　但馬出石の藩士宅に伝わった「上田城構之図」というのがあります。常田御屋敷は「御屋形」と表記され、清明小学校の所は「中屋敷」とされています。中屋敷は御屋形と同じく四方が堀で囲まれています。寛永年間（一六二四年～一六四五年）の図とされていますが、再建された上田城が描かれていますから一六二八年以降のものです。ここに非常に興味深いものが描かれています。現在北大手会館のある辺りですが、と書かれた所に掘割とおぼしきものが一本あるのです。北は蛭沢川からの支流、西側はその支流からでた水路が百閒掘につながっていますから、そこは三方が水路（堀）で囲まれていることになります。東信史学会の機関誌「千曲」で尾見智志氏が「玄三屋敷」がここにあった可能性について書いています。しかも「げんざ」は真田信之の源三郎につながるのではないかというのです。確証はありませんが興味深いことです。今は跡形がありませんから、壊されてしまったか、あるいは造る予定が何らかの事情で造らずじまいになってしまったのかも知れません。

　この図で中屋敷とされている清明小学校の所は正保四年（一六四七年）に幕府に提出された上田城絵図では古屋敷と表記されています。玄三屋敷の痕跡はここにはまったくありません。この古屋敷の北東部は堀がとしされ、鬼門除けがはっきりわかります。昌幸時代の縄張りをほぼ踏襲したという再建された上田城は鬼門除けの隅落としが施されていますから清明小学校の中屋敷は昌幸の上田築城と同じ時期に建設されたと推定されます。しかも城主の昌幸が居住した可能性もあります。上田高校の御屋形には鬼門除けは見られませんが、これは元々が常田氏の屋敷だったからといえます。ここには鬼門にあたる塀の角にの古木がありますが、鬼門除けとして信之が植えたのかも知れません。玄三屋敷があったとすれば、規模はやや違いますが館がほぼ同間隔で三つ存在していたことになります。

　玄三屋敷の有無はともかく、信之は上田高校の屋敷で主に政務を執る陣屋支配の体裁を取りました。補助的に清明小学校の屋敷を使ったのではないでしょうか。では何故上田高校の所だったのでしょう。真田信之は関ヶ原以後に信幸から信之に名前を改めています。徳川に刃向った昌幸の色を消す徳川への気遣いといわれます。昌幸が住んでいたともいわれる清明小学校の屋敷を政務所にしなかったというのも徳川への配慮の一つだったのではないかと思えるのです。

武家町の形成

　上田城の大手（追手）は今の上田商工会議所の所です。八十二銀行上田支店の西脇は駐車場につながる道路ですが、ここは絵図で見ると堀になっています。海野町から来た道路が土橋を渡って石垣に突き当たり、右に折れてすぐまた左に折れ、城に行く道になります。ご存知のを形成しているのです。第一次上田合戦では徳川軍は大手を突破して上田城に迫りますが、当時既に堀があったかどうかは分かりません。伝承では大手門らしきものはあったようですが、江戸時代以後の絵図には門はありません。ここから内側が上田城の三の丸であり、武家町はこの三の丸に築かれました。文献を見ると昌幸の時代はこの三の丸の堀際には一部の町人も住み、寺も置かれていたようです。

　大手から城に至る通り、すなわち現在のＮＴＴ，市役所、上田第二中学校の通りは大手町と呼んでいますが、何十年か前まではと呼ばれていました。昌幸が戦国大名となっていく過程で、武田家臣時代の同僚などを多く召し抱えています。行き先の無くなった旧武田家臣が真田を頼って来た例も見られます。昌幸はそういった武士達を多くこの町に住まわせたといわれます。旧武田家臣でも真田にとっては新参者です。新参者というと軽く見られがちですが、昌幸はこういった人達を重要な大手に住まわせ、軽くは扱いませんでした。大名としてのし上がって行くにはこういった人達の力を必要としたのです。として敬意を持って接したといわれます。

　原町からふれあい福祉センターの脇を西に入る通りがです。連歌が盛んな頃連歌師が住んでいたとされます。これも武家町です。（幸村）が九度山時代に信之と交わした書状から連歌を楽しんでいたことがうかがえます。信之もたしなんでいたようです。仙石氏以後に連歌師が住んでいたという記録はありません。連歌町という記載は元禄時代の絵図にありますが、町名は真田時代からのものだと思われます。全国でも大変珍しい町名ということです。これも真田の史跡ではないでしょうか。この他にも真田時代からの町名と思われるものがいくつかありますが、現在は中央何丁目とか材木町何丁目とか新しい住居表示になってしまい、伝統的な地名が人々の記憶から消されつつあります。歴史研究愛好家にとっては大変残念なことです。

商人町・職人町の形成

　城下町の経営には産業の育成ということが不可欠です。家臣団を集めた武家町とあわせて商人町・職人町の形成が計画されました。真田昌幸は直系を自称するのいた海野郷（現東御市本海野）と昔からの本貫地である原之郷（現上田市本原）から住民を移住させ、とを中心街としてつくりました。海野町は関ヶ原以前（第二次上田合戦以前）に、原町は信之の時代になってから実行されています。まちの機能を住民ごとそっくり移したといわれます。移転前の海野は月に六回のの立つ場所であり、また武田氏支配の時代には物資の輸送のためにしかれていた伝馬制の宿郷が置かれていたそうです。職人も多く住んでいました。原之郷にもの機能がありました。

　戦国末期から江戸時代初期にかけて形成整備された近世の城下町にはよくその発展維持のために主要な街道を取り込んでいます。昌幸は上田にを取り込みました。上田に物資を流通させ、あわせて旅人のための宿場町にもしたのです。海野町には本陣とが、原町には問屋が置かれ宿場町の機能を果たしました。

　工業の育成にも努めました。海野郷から鍛冶職人と染物職人を連れてきてそれぞれとを造っています。その場所も水を使うという事でしょうか、鍛治町は蛭沢川べりに、紺屋町は矢出沢川の下流に当たる場所に造りました。両町とも町の成立は元和元年（一六一五年）といわれますが、職人を移り住まわせたのは築城と同時ぐらいだったと考えられています。町の成立に年数がかかったのは、蛭沢川と矢出沢川が完成してから実行したということではなかったかと思います。

城下囲いの

　太郎山の麓や千曲川沿いには戦国期以前から郷村が散在していたそうです。真田昌幸はこれらの郷村を城下町の外郭地帯形成のために町の入口に移住させました。街道の維持や防衛の目的もあったと思います。北国街道東南部、江戸方面からの入口に、。北西の善光寺・越後方面からの入口に、、、。西南の松本方面、保福寺街道からの入口に。北東の上州・沼田街道入口に。計八か村でこれを「城下囲い八邑」と言っています。八か村の住民は大部分が農民でしたが、その屋敷地については城下町と同じく無年貢とされていました。上田で合戦が起こると住民は男女とも城内へ籠ったと伝えられています。

　城下囲いにするため散在していた郷村をまとめる作業もこの時しているようです。例えば秋和村は太郎山の麓にあった山根六工、内屋敷、寺川と千曲川べりの在家を一緒にし、また房山村は和具、円明寺、戸山岸、古町、六工、向川原を集めたと記録にあるそうです。

寺社の移転と配置

　城下町にはその外縁部にお寺や神社が置かれることが通例です。防衛上の備えといわれますが、上田城下町には横町から北へ、、、。鍛治町に入って、と並び、房山に入ってがあります。

さらに新田には、、、。常磐城に。諏訪部にという具合です。この並び方は明らかに城下町の備えとしての計画的なものです。

この内、日輪寺は絵図で見る限り防衛というより観音信仰の意味合いが大きいと思います。開基といわれますが、海野幸義は記録によると天文十年（一五四一年）に討ち死にしていますので、移転される前に海野にあったことを示しています。東御市本海野の国道十八号線沿いにキャロットというレストランがありますが、海野氏の館はこの辺りにあったということです。しなの鉄道の線路から上の段丘上に館が築かれていたわけです。この段丘の一角に観音坂と呼ばれていた坂があるそうです。ゆかりを感じます。

　願行寺も海野から移した寺です。今も海野宿の端にお堂がありますが、そこが願行寺の旧地とされています。最初三の丸に移転し、その後城下町の整備と共に海野町の突き当たりに再移転されたということです。安土桃山様式を思わせる優雅な四脚門があります。

宗吽寺は大手の堀際にあったということです。南北朝時代の年号が入った石製火燈があります。

伊勢宮社は大手の松原から秋和に遷座し、そこから元和八年（一六二二年）十月に現在地に移転したということが信濃国小県郡年表に記述されています。

月窓寺はの開基で常田に建立、天正十三年（一五八五年）第一次上田合戦の際真田昌幸の臣池田長門守が火をかけて焼失したのをに再建し、さらに城下町整備のため鍛治町に移したということです。

　本陽寺は真田信之松代移封後に仙石氏が小諸から移転した寺ということですが、その伽藍の規模と位置は城下町整備の一環で計画されたようにも思われます。仙石氏入封前の正保の絵図にも本陽寺にあたる場所に寺の表記があります。はたして仙石氏が用地を整備し建立したのか、真田時代に計画していた所に仙石氏が持ってきたのか、既にあった寺を仙石氏がどこかに移したのか、興味がわくところです。

金昌寺は武石村小寺尾にあった琴松禅寺が昌幸によって移されたということです。昌の字が昌幸とのいわれを感じさせます。

　大輪寺は砥石城の麓から移転したということです。昌幸の正室（山の手殿）の立派な墓があります。

海禅寺と八幡社は本海野海善寺からの移転です。先に述べた海野氏館の北東部、鬼門の位置にあったものを上田城の鬼門の方角に移したものです。勿論鬼門除けの意味があります。本海野海善寺の旧地には宝篋印塔やら五輪塔が集められて雑然とおかれています。八幡社は現在も地元の人達にまつられています。

呈蓮寺は建久年間（一一九五年頃）曽我兄弟の兄祐成の妻が諸国参拝の折、善光寺からの帰途、太郎山麓に建てた虎立山祐成寺が始まりと伝えられます。幕末に天下に名の轟いた数学者・の墓があります。

　北国街道を矢出沢川沿いに西に進むと右側に立派ながあります。門から北へ川越しに進むと向源寺本堂に至ります。向源寺は武田氏支配時代には上田原の石久摩神社の近くにあったそうです。小県郡年表に「元和五年記三貫文新町眞言宗向源寺」という記述がありますが、この新町というのは西脇新町のことです。ですが向源寺は浄土真宗（一向宗）のお寺です。境内に同じ浄土真宗の正栄寺があります。その昔はだったということです。今はありませんが、他にも塔頭があったそうです。俳人小林一茶が滞在していたという記録もあります。今後いろいろ研究しなければいけないお寺です。

諏訪部には芳泉寺があります。ここは歴代の武将にいろいろ関係しているお寺です。天文年間（一五四〇年代か？）下之条に村上氏の臣・田中修理正常福が建てたがもとであり、千曲川の水災で諏訪部に移ったと小県郡年表にあります。真田氏の時代となり、元和六年（一六二○年）信之の妻・（）が亡くなった時といわれますが、信之はここを菩提所と定め大蓮院のを建設、宝篋印塔形式の立派な墓を建てました。寺の名も戒名の大蓮院殿英誉皓月大禅定尼からと改めました。常福寺はこの時下之条に移ったといわれます。翌々年、仙石忠政が上田に入ると、小諸から宝仙寺を移し、大英寺は松代に移りました。信之は大蓮院の御霊屋を松代に移築しましたがこれが現在松代大英寺の本堂として使われています。芳泉寺の前の道路は常福寺坂と呼ばれています。坂の名前に常福寺が残りました。芳泉寺は唯一城下町整備のために移されたのではなく元からこの場所にあったということになります。ただ大英寺にする際、信之が現在の地に建て替えたとしている文献もあります。

寺に伝わる古文書によると文政七年（一八二四年）に松代藩主が小松殿の墓参りに訪れています。翌年六文銭の紋を芳泉寺が使うことを許可しています。元々の紋は仙石氏の永楽通宝の紋でした。今芳泉寺にはこの二つの紋の他三つ葉葵の紋も見られますが、これは小松殿の輿入れの際に徳川家康の養女という形を取ったという伝承に基づくものと思われます。

天正十三年（一五八五年）が真田昌幸に謀殺されますが、謀殺の舞台は上田城内ではなく常福寺であったという説があります。大河ドラマ「真田丸」では、信繁の祝言に招かれたということになっていますが、囲碁に誘われたとしている書物が多いです。招かれたとはいえ少ない従者で城には行かないだろうというのが根拠のようです。真偽のほどはわかりませんが、謀殺後室賀正武の妻と嫡男の久太夫は常福寺の住職に助けを求めていることは事実です。新潟県上越市の上杉文書からわかりました。

秋和の北国街道沿いに正福寺と長昌寺があります。この二つのお寺も位置取りからすれば城下町形成のために移転された可能性があります。移住させられた住民の心の安定を図ったのではないかとも考えられます。今後の研究の課題です。

強運を味方にした真田昌幸

真田昌幸は最後はで蟄居のまま生涯を閉じますが、大変運のいい武将だったと思います。自身も確かに強く、頭もよかったのでしょうが、あわやというところを相手が退いてくれて三度助かっています。

一度目は上田築城に着手した時です。が真田を攻撃するため大軍をに集結させました。ところが麻績で反乱が起き、景勝は集結させた軍をそっくり麻績に向かわせたといわれます。

二度目は第一次上田合戦の時です。確かに緒戦は真田軍の大勝利でしたが、徳川軍は八重原に陣を立て直し家康の援軍を待っていました。小競り合いをしながら、にらみ合いが続いていたようです。ところが突如徳川軍は遠江に退き上げてしまいます。重臣が秀吉のもとに走ったことが原因とされています。近年の研究でこれだけが原因ではなかったといわれていますが、いずれにしても二度目の相手退却です。

三度目は関ヶ原を前にしての第二次上田合戦です。秀忠の三万八千もの大軍を巧みな交渉術で一週間も足止めさせたといわれます。しかし桁違いの大軍に一気に攻撃されたらさしもの真田軍も白旗を上げざるを得なかった可能性が高いと思います。この時も上方の情勢が風雲急を告げ、「上田攻めを切り上げて早く上方へ向かえ」という家康の命令で秀忠は上田攻めを諦めています。運も味方してくれたのです。

真田昌幸は上田の名付け親

上田市は今や人口十六万人を数える長野県内三番目の都市です。自然発生的に人が多く住むようになったわけではありません。真田昌幸が築いた城と城下町を基としています。「上田」という地名も昌幸がその城を「上田城」と名付けたことに拠ります。昌幸の上田築城は先に述べたように天正十一年に始まり同十三年頃に一応の完成を見たとされています。上田城という名が世に出てくるのはそれより十年ほど経ってからです。文禄四年（一五九五年）の豊臣秀吉朱印状に「上田　さな田安房守居城」と記されているのが確実な史料に見える「上田」の初出ということです。何故「上田城」と名付けられたのかは、いろいろ推測はされるのですが正確なことはわかっていません。「上田」という地名が付近に無かったわけではありません。古来から「上田庄」と呼ばれた所がありました。しかしそこは神科台地の長島周辺の所であり城とはかなり離れています。

また先に紹介しました松代佐久間家に伝わった天正の上田古図にも「上田」は登場しています。この上田は何者なのでしょうか。はたして城の命名に関係しているのでしょうか。歴史はわからないことばかりです。

では当初上田城は何と呼ばれていたのでしょうか。記録上は「伊勢崎城」と呼ばれることが多かったようです。では何故「伊勢崎城」なのでしょう。これまた正確なところは不明ですが、真田昌幸が上田に進出してくる直前の本拠は砥石城でした。砥石城の下は伊勢山です。伊勢山に一時昌幸が居住していたことは書状などから確実です。この伊勢山の先に築いたので「伊勢先城」としたのかも知れません。

わからないことばかりですが真田昌幸は自分の作品に自分で名前をつけたのは確かなことでしょう。

おわりに

真田氏は非常に魅力的な一族です。大河ドラマ「真田丸」の登場人物もそれぞれ個性があって面白いです。でも資料を調べたり本を読んだりしていると今でも「これは何故だろう？」と思える所が数多く出てきます。本当に飽きさせない一族です。

上田城を中心として広がった上田城下町の姿を見てみると、南は千曲川が流れ、北は太郎山系が迫り、西には岩鼻の断崖が存在しますからまちを広げていくには東に伸ばすしかありません。しかしそれにしてもこと防御という観点から捉えると対東側にばかり集中している気がいたします。西側に対する防御はあまりにも手薄という印象を受けるのです。

上田城は徳川家康の助力があって造られたということは寺島隆史氏の研究などにより今や定説になっています。昌幸が家康に「対上杉」のために必要だと説いたに違いありません。上杉軍は虚空蔵山まで迫って来ていたのです。また徳川傘下の武将たちも築城の手伝いをしたということもわかっています。一体昌幸はどのような図面を見せて家康にプレゼンしたのでしょうか。どのように説明したのでしょうか。ドラマにも阿茶の局が家康に言うセリフの中に「お前様が造った城に苦しめられているのですね」というのがあったと思いますが、まさにその通りになったわけです。大変興味がわくところです。

真田が上田を統治したのは上田築城開始の天正十一年（一五八三年）から信之の松代移封（元和八年　一六二二年）までの約四十年間です。仙石氏、松平氏統治より格段に短い期間です。しかし今でも「上田といえば真田」なのです。上田市民にこれだけ愛されている真田昌幸は幸せ者といえるのではないでしょうか。